

総長海外出張報告

～ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジ及びエディンバラ大学訪問～

5月2日(木)から8日(水)にかけ、英国に出張しました。私が、名古屋大学の業務として英国出張したのは、2014年、私が総長を拝命する前年、学術研究・産学連携推進本部長として、英国、ベルギー、フランスの産学連携状況を視察するために訪問して以来2度目です。当時は、今のようなブレグジットの問題は起こっておらず、英国はEUで独自の位置を保っていました。また、好景気の中で物価も日本に比べて大変高かった記憶があります。英国は、政治経済の面で今、大きな問題を抱えていますが、高等教育や私の専門領域である医学教育では、今でも世界最高峰とされています。

今、日本の国立大学は大きな曲がり角にあり、名古屋大学も試行錯誤を重ねながら、多くの改革を進めています。英国の大学モデルは、日本でも様々な機会に参考とされており、私も関心を寄せていたため、かねてから英国の大学との交流を深めるためにも再訪したいと考えていました。今回は、ゴールデンウィーク後半を利用して、名古屋大学と関係の深い2大学を訪問し、英国の事情を肌で感じるとともに、今後の交流の発展方策について意見交換をしましたので、所感を記したいと思います。

1. ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジの訪問

最初に、ケンブリッジ大学のセント・ジョンズ・カレッジ(St John's College)を訪問しました。ケンブリッジは大学都市であり、ケンブリッジ大学(University of Cambridge)のもとに31のカレッジが町全体に散在し、大学とカレッジが密接な関係を保ちながら運営されています。大学は研究と専門教育中心、カレッジは基盤的な教育中心(とはいっても専門領域が特定されている)の機関と役割が明確に分かれているほか、大学は国営、カレッジは民営(私立)で、経営体制も日本の国立大学とは全く異なるものです。それぞれのカレッジは、保有する資産の活用や寄付集めを独自に行いながら経営を成り立たせているのですが、当然、カレッジ間の財源格差が生じます。よって、カレッジ間で教育の質の格差が起こらないよう、資金の再配分をする仕組みもあると聞きました。

セント・ジョンズ・カレッジは1500年代初頭に設立された長い歴史のある学校で、数あるカレッジの中でも最高峰に属する学校のひとつです。多くの歴史的な建物のある美しいキャンパスに豊富な教授陣がおり、素晴らしい人材を送り出し続けています。名古屋大学は、2015年から学部学生の短期交換留学プログラムを実施しており、毎年6名の学生がこのプログラムを通じて交流し、双方から大変評価の高いプログラムとなっています。セント・ジョンズ・カレッジとの交流プログラムを持っているのは、日本では名古屋大学だけですが、今のところ順調に交流が続いています。交流を始めるきっかけは、当時、サバティカル制度を利用してケンブリッジに来ていた理学研究科の岡本祐幸教授がカレッジのトップであるDobson学長と直接交渉したことによるものです。今回の訪問では、Dobson学長はもちろんのこと、Salmon副学長をはじめ、名大生がお世話になっている多くの先生方と意見交換ができました。



写真)Dobson 学長との懇談



写真)ポート・ラティン・フィーストに出席(岡本教授(左)・Dr. Matthias D ö r rzapf(真ん中))

ポート・ラティン・フィーストはセント・ジョンズ・カレッジの伝統的な年中行事で、セント・ジョンズ・カレッジに貢献している卒業生や協定校、関係する機関などを招待して学長主催で開催される。今回も本学を含めて、約120人が招待された。

2. エディンバラ大学訪問

理学研究科が交流を続け、名古屋大学で 2 番目となるジョイント・ディグリープログラムの相手方であるエディンバラ大学では、国際担当副学長や関係教員、さらには本学の素粒子宇宙起源研究機構(KMI)のカウンターパートであるヒッグスセンターも訪問しました。印象的だったのは、ブレグジットの影響が高等教育や研究にも及ぶことを、関係者が皆かなり深刻に考えていた点です。それはつまり、EU 諸国からの留学生への影響、EU からの基礎研究財源獲得に及ぼす影響などです。

また、エディンバラ大学は、海外の大学へ留学するプログラムを学部学生に対して実施しており、留学先として人気が高いのは英語圏であるが、日本にも関心を寄せている学生が多数いるので、今後、日本との交流もより盛んにしていきたい、と積極的な発言がありました。こちらからは、名古屋大学の G30 プログラムや、国際共同研究推進のため、他大学と実施している Joint Seed Funding の事例を紹介し、これからの課題としました。また、新たな可能性として、医学部の人材交流プログラムの可能性について協議し、今後、前向きに進めて行く方向で一致しました。

なお、ジョイント・ディグリープログラムでエディンバラ大学に滞在中の名古屋大学の大学院生に話を聞く機会を持ちました。「最初から留学という目標を持っていたので、英語は計画的に勉強したつもりだったが、やはり最初は語学や生活習慣などで苦労した。今は元気にやっていて、モチベーションも上がっている。日本人は、エディンバラでは圧倒的に少ないので、名大生はもっと勇気をもって、海外に出てきてほしい」、というメッセージをもらいました。



写真)エディンバラ大学にて



写真)King's Building

今回の訪問は、二つの大学の名古屋大学に対する思いが大変強いことを再認識するとともに、今後より一層、双方が交流を活発にしていく意思を確認しあえたという点で、非常に有意義なものでした。